

村のおばあさん インド

おだやかな日のさしている冬の朝のことです。空は青く、雲もなく、そよ風が木の枝をゆすり、こずえでオウムが追いかけてっこをしていました。子どもたちは、さとうきび畑で、かくれんぼうをして遊んでいました。なにもかも陽気で楽しげでした。

おじいさんとおばあさんが、たき火のそばにすわって、手を温めていました。

いきなり、遠くのほうで土ぼこりが舞い上がったと思うと、馬に乗った男の人が近づいてきました。男の人は、たき火のところまで来ると、

「のどがかわいているんです。水をくれませんか」といいました。おばあさんは、にっこりして、

「おいしいさとうきびの水がありますよ。ちよつと畑までいらつしやい」といいました。

男の人は、おばあさんについて行きました。おばあさんは、かまで、さとうきびのくきを一本切りました。あまい水がほとばしり出しました。おばあさんは、それをコップに入れてさし出しました。

男の人は、水をぐつと飲みほすと、もう一杯ほしいといいました。

おばあさんは、もう一度、かまでさとうきびを切りました。ところが、こんどは水が出ませんでした。おばあさんは、おどろいていいました。

「神さまが腹を立てていらつしやる。大地が突然干上がったのか、それとも王さまが情け知らずになられたのか。そうでなければ、こんなことが起こるはずがない」

男の人は、おばあさんの足もとにひれふしていいました。

「神さま、おゆるしください。わたしが王なのです。水を飲みながら、わたしは考えていました。この土地はとてもこえている、これなら土地にかける税をもっと増やしてもいいぞ、この土地は、もともとおれのものなんだからと。わたしは情け知らずでした」  
王さまは、もう一度おばあさんに水をほしいといいました。おばあさんが、かまでさとうきびを切ると、今度はあまい水がほとばしり出しました。

村上郁再話

資料『インド昔話抄』山室静編訳／第三文明社